

多目的コホート研究 (JPHC Study)

食生活パターンと胃がんリスクとの関連について (詳細版)

International Journal of Cancer 2004; 110 : 435-442

Prospective study of three major
dietary patterns and risk of
gastric cancer in Japan

食生活パターンと胃がんリスクとの
関連について:

厚生労働省研究班による
「多目的コホート研究コホートI」

1 タイトル

本内容は国際がん雑誌(International Journal of Cancer 2004;110 :435 -442)に発表したものに準じたものです。

背景

- 日常の食事では、個別の栄養素としてではなく、食品として様々なものを食べるために、複数の栄養素が相互に作用している。従って、**食生活全体のパターン**に着目することにより、食物と疾病との関連を総合的に検討することが重要である。
- 欧米では食パターンとがんとの関連についての報告はあるが、日本を含めた**アジアからの研究はほとんどない**。

2 背景

目的

- **食生活パターンと胃がんリスクとの関連を住民ベースの前向き研究の中で検討する**。

3 目的



4 厚生労働省多目的コホート

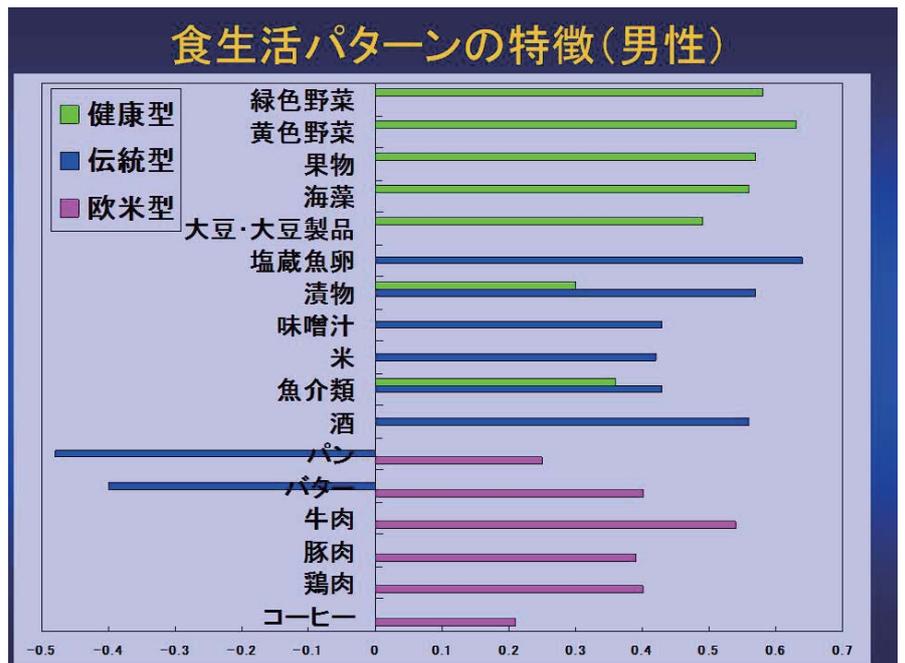
国内11保健所地域約14万人の地域住民を対象とした厚生省多目的コホート研究のうち、1990年に開始(コホート)した4保健所管内14市町村に住民登録されていた40~59歳の男性26,998名が本研究の対象者選択のベースとなっている。

対象者

- コホートI地区対象者のうち葛飾地区在住者、アンケート未回答者、重篤疾患の既往のある者、追跡期間中に外国籍または初めからいないことが判明した者、総摂取カロリーの極端に多い者(総摂取カロリーの upper 2.5%) および少ない者(下側2.5%)を除く男性20,300名および、女性21,812名。

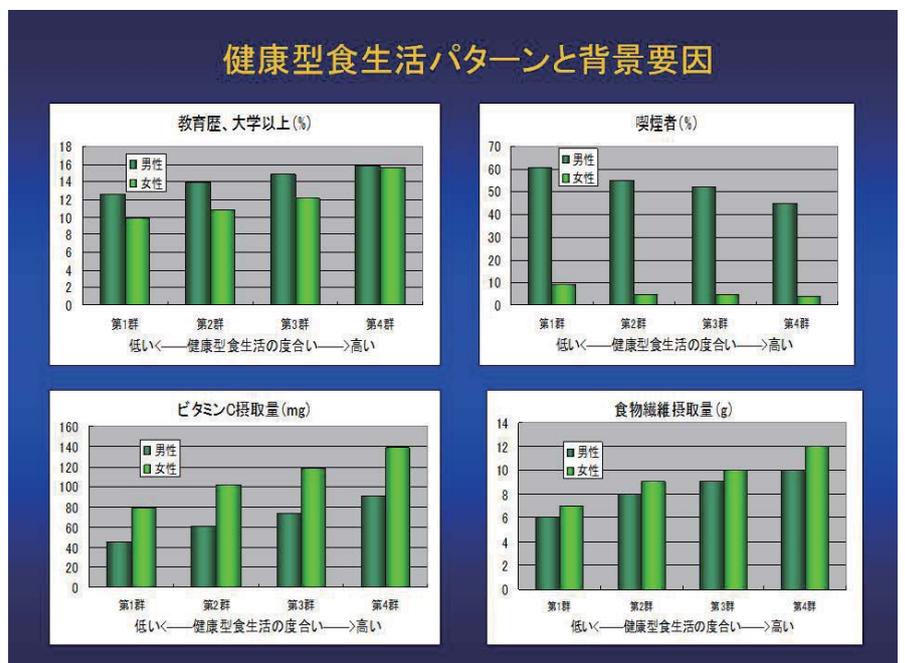
5 対象者

6 食生活パターンの特徴(男性)



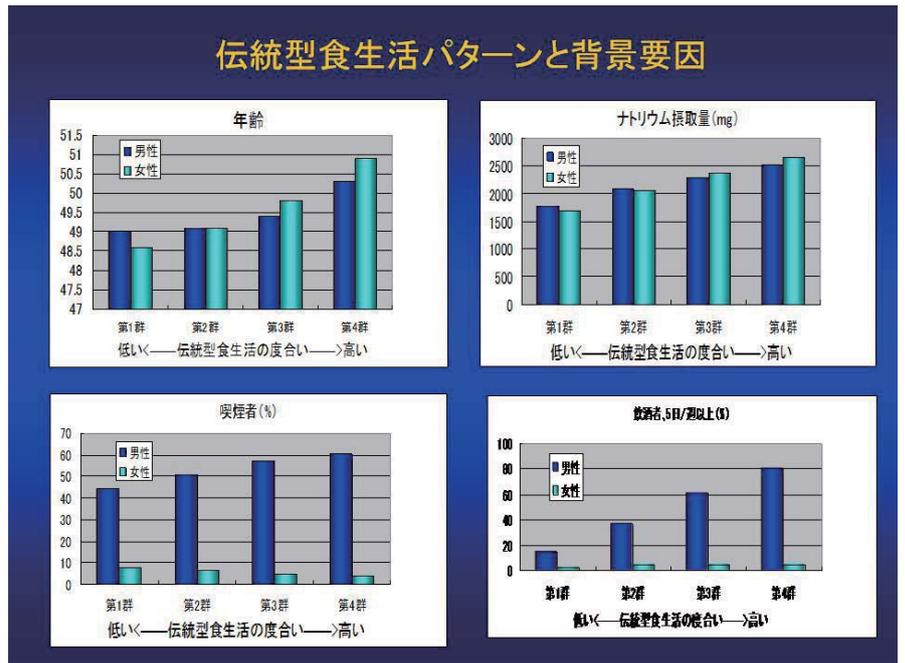
因子分析により3つの食生活パターンが同定された。野菜、果物、大豆食品、海藻、きのこ、牛乳、豆、ヨーグルトの摂取と強く結びついた(を多くとる)食生活として「健康型食生活」、漬物、塩蔵魚卵、塩から、魚介類、味噌汁、米と結びついていた(を多くとる)一方で、パン、バターとは逆の結びつきを示した(はあまりとらない)食生活として「伝統型食生活」、牛・豚肉、鶏肉、チーズ、パン、バターと結びついていた(を多くとる)食生活として「欧米型食生活」が同定された。これら3つの食生活パターンの特徴は男女でほぼ一致していた。

7 健康型食生活パターンと背景要因



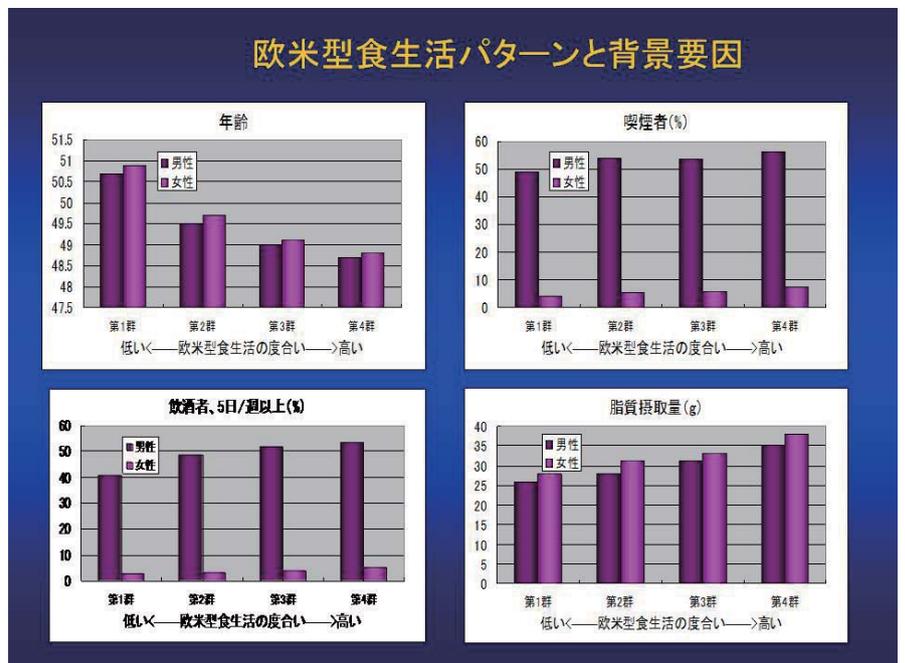
健康型食生活傾向の強い人では教育歴が高く、喫煙者の割合は少なく、ビタミンA、カロテノイド、ビタミンC、食物繊維、脂質を多くとっているという特徴があった。

8 伝統型食生活パターンと背景要因



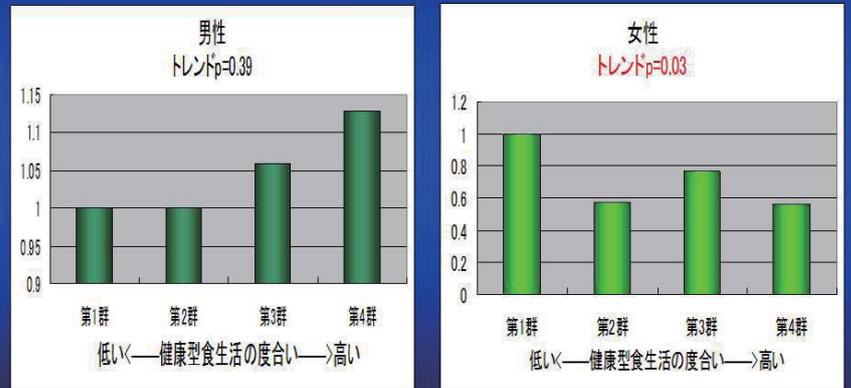
伝統型食生活傾向の強い人では年齢が高く、総エネルギー・ナトリウム摂取量が高く、胃がんの家族歴を持つものが多く、教育歴が低かった。男性では喫煙者、飲酒者の割合が高かった。

9 欧米型食生活パターンと背景要因



欧米型食生活傾向の強い人では年齢が若く、喫煙者・飲酒者の割合が高く、脂質・ビタミンAの摂取量が高いという特徴が見られた。

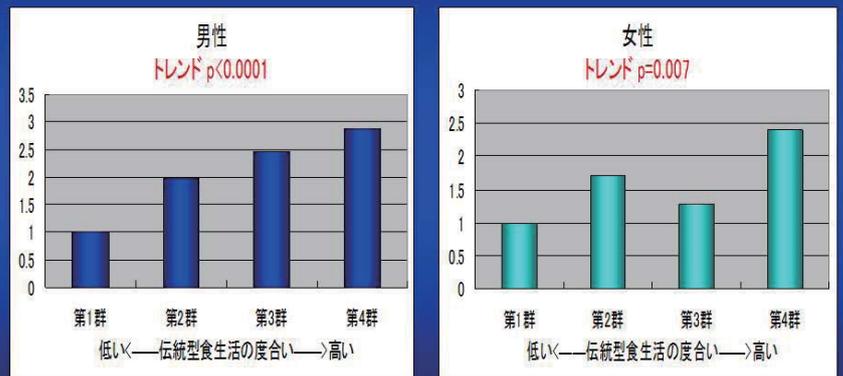
「健康型」食生活パターンと胃がんリスクとの関連



10 「健康型」食生活パターンと胃がんリスクとの関連

年齢、bmi、総エネルギー摂取量、教育歴、胃癌の家族歴、喫煙歴(男性)、飲酒歴(男性)で補正したときの相対危険度を算出した。男性では健康型食生活と胃癌リスクとの間に関連は見られなかったが、女性では負の関連が見られた($p=0.03$)。

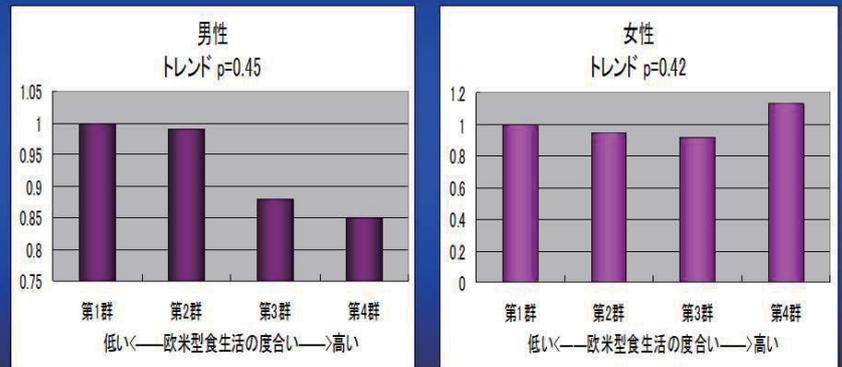
「伝統型」食生活パターンと胃癌リスクとの関連



11 「伝統型」食生活パターンと胃癌リスクとの関連

伝統型食生活パターンと胃癌リスクは男女ともに正の関連を示した。

「欧米型」食生活パターンと胃癌リスクとの関連



12 「欧米型」食生活パターンと胃癌リスクとの関連

欧米型食生活パターンと胃癌リスクとの間には男女ともに関連はみられなかった。

研究の限界

- 各食生活パターンと関連する他の要因の影響を除ききれしていない可能性がある。
- 使用した食生活調査票は44食品しか含んでいない。
- 因子分析の限界

13 研究の限界

因子分析より導かれた結果は選択された因子や因子数、回転の手法などにより影響を受けやすい。われわれはさまざまな因子数で分析を繰り返し、また、ランダムに2群に分けて再現性も確認済みである。結果の解釈の普遍性も気になるところだが、同じ日本だけでなく、他国でも似たような食生活パターンが導き出されている。

まとめ

- 因子分析により日本人の食生活パターンを同定した結果、「健康型」食生活の女性で胃がんのリスクの減少と関連していたのに対し、「伝統型」食生活パターンは胃がんのリスクの上昇と関連していた。

14 まとめ

本研究の研究関連組織 (1990-1999)

- **国立がんセンター**：津金昌一郎（主任研究者）、佐々木 敏、祖父江友孝、**国立循環器病センター**：緒方絢、馬場俊六、**岩手県二戸保健所**：宮川慶吾、齊藤文彦、小泉明、佐野譲、**秋田県横手保健所**：宮島嘉道、鈴木紀行、長澤信介、**長野県佐久保健所**：真田英機、畑山善行、小林文宗、内野英幸、白井祐二、近藤俊明、**沖縄県石川保健所**：岸本幸政、高良栄吉、金城マサ子、譜久山 民子 **協力研究者**：松島松翠、夏川周介（佐久総合病院）、渡辺昌、赤羽正之（東京農大）、小西正光（愛媛大学）、磯博康（筑波大学）、梶村春彦（浜松医大）、坪野吉孝（東北大学）、兜真徳（環境研）、富永祐民（愛知がんセンター）、飯田稔、佐藤真一（大阪府立成人病センター）、山口百子、松村康弘（国立健康

15 本研究の研究関連組織(1990-1999)

1990年から1999年までの間に、分担研究者として本研究に参加した者の一覧である。本研究は、その他にも研究の参加者、保健所や市町村の関係者など、数多くの人々の協力のもとに、実施されてきた。本研究は、厚生省がん研究助成金による指定研究班「多目的コホートによるがん・循環器疾患の疫学研究」による共同研究である。